

樹木・花にまつわる物語

第1回 ウメ 梅

河本義宣

日本人にこよなく愛されているウメ・梅ですが、そのルーツは中国南部(中部)原産で、奈良時代以前に渡来した帰化植物です。江戸時代のウメの呼び名はムメ(mume)で、シーボルトと植物の共同研究者のツッカーリーニによって、学名は*Prunus mume Sieb. et Zucc.*と命名されました。

属名Prunusはサクラ属のことで、仲間にアンズ・モモ・サクラがあります。ウメには500種以上の品種があり、全国各地で植栽されていますが、大分県には野生化したウメがあります。

日本では万葉時代(7世紀半～8世紀半)に花と言えば「うめ」で、万葉集には116首の歌が載っています。古今集の時代に入る(以降現代まで)と花といえば「さくら」になりました。

中国原産と書きましたが、中国では紀元前(神農¹⁾の時代?)から梅は塩と共に最古の調味料とされてきました。日本語にもなっている「塩梅(あんばい)」はこのウメと塩の味付けが上手く行ったことを示す言葉です。

書経²⁾に「尔惟訓于朕志。若作酒醴、尔惟麴蘖。若作和羹、尔惟塩梅。」あります。

これから四字熟語の「和羹塩梅^{わこうえんばい}」が出来ました。

通釈:(王が傳説³⁾に問いかけする場面で)もし酒やあま酒を作るとするならば、汝は麴に当たることになる。もし味のよい汁を作るとするならば、汝は塩と酢に当たることになる。

語釈:「和羹」はいろいろな材料・調味料をませ合わせ、味を調和させて作った吸い物。「塩梅」は塩と調味に用いる梅酢のこと。この料理は、塩と酸味の梅酢とを程よく加えて味つけするものであることから、上手に手を加えて、国をよいものに仕上げる宰相らをいう。

また、ウメは中国の医薬書「神農本草経」の中品の中に「梅実」として収載されています。効能は「下



神奈川県湯河原幕山公園にて(2015年2月17日)

気、除熱、煩満、安心。肢体痛、偏枯、不仁、死肌。去青黒痣、悪疾。」とあります。

「神農本草経」は神農氏の後人による中国最古の本草(医薬)書。後漢から三国時代に成立したと言われましたが元本は散逸し、現存のものは500年ごろ陶弘景がまとめたものです。365種を収載、上品(120品)は無毒で長期服用が可能な養命薬、中品(120種)は毒にもなり得る養生薬、下品(125種)は毒が強く長期服用が不可能な治療薬です。

(インターネットなどから引用しました)

■注

- 1) 神農: 中国古代神話上の帝王。人身で牛首。農耕神と医薬神の性格をもち、百草の性質を調べるためにみずからなめたと伝えられる。日本でも、医者や商人の信仰の対象となった。(デジタル大辞泉より抜粋)
- 2) 書経: 中国の経書。五経の一。20巻、58編。孔子の編といわれる。堯・舜から周までの政論・政教を集めたもの。もと「書」「尚書」。宋代から「書経」とよばれる。秦の焚書で散逸、前漢の伏生の口伝「今文(きんぶん)尚書」と、孔子の旧宅で壁中から発見された「古文尚書」との二系統があったが、現在「古文」とされている「書経」は東晋の梅賾の偽作。(デジタル大辞泉より)
- 3) 傳説: 中国、殷の高宗の大臣。刑人とともに道を補修していたところを高宗に見いだされて宰相となり殷の中興に寄与したという。(三省堂 大辞林より)